図書館ニュース

特集 本に親しむ

No.79

●平成22（2010）年10月15日●名古屋女子大学中学校高等学校図書館●

http://lib.meijodai.ed.jp/

私と読書

鈴木文悟 校長（名古屋女子大学中学校・高等学校）

私が本を好きになったのには何人かの人との出会いがあったからである。

そして、初めに挙げなければならないのは父親であろう。私の名前も「文学を愛し好きになってほしい」という思いから父が名付けた。父の専門は土木工学であった。そして、父の書斎の両壁の書棚には、いっぱい難しい本が並んでいた。今、セピア色の写真からかすかに分かるのは殆どが文学書籍であることだ。工学を学んだ人が何故文学なのだろうか不思議ではあるが、何故かはもう尋ねることはできない。ただ、生まれた私の名前を「文学を愛し好きになって欲しい」と願って名付けたということは、自分自身も文学が相当好きだったんだろうと容易に想像がつく。

我が家にはテレビがなかった。きっと本好きにさせるためにテレビを買わないでおこうと両親で考えたのだろうと思ったが、これは違って、単にテレビを買うお金がなかっただけのようである。

ただ、そのお陰かどうか分からないが、夜も何となく机の前に座らなければならない雰囲気があった。ちょっと早く居間にでも戻ろうものなら、冷たい視線が投げられ刺さってくるような恐怖感があった。だから、仕方なく机の前で本の扉を開いていたように思う。

ただ、本当に本の面白さを教えてくださったのは、当時、地理の先生であった中島先生であったと思う。先生は、私の飢えや渇きを知っていたかのように、ヘルマン・ヘッセの「車輪の下」の本を読んでみたらと紹介してくれた。

どうして、ぴたりと読みたい本を当てられたのかわからない。受験生はみんなそうなのか、年齢からしてみんな同じ悩みや苦しみを味わうものなのだろうかわからない。しかし、あのとき私がいちばん考えたいことと教えを請いたいこととぴたりと重なった本だった。とにかく夢中になって読んだ記憶がある。

これは、「本はすごい。本は面白い。」と私が意識をした最初の「本」であった。中学3年生の持つ悩みや悲しみ、苦しさ、切なさ、孤独感すべてを受け止めてくれ、希望を与えてくれた本であった。主人公少年ハンスに自分を重ね合わせ、大人への反抗や社会への抵抗を抱きつつも切なさを味わう自分の姿を見たような気がした。そう言えば、親友ハイルナーとのファーストキスのシーンは驚きをもったことを記憶している。（気持ち悪さもあったのだが……。）

最後に、もう一人私を本好きにしてくれた人がいる。残念だが、その人を紹介する間がない。その人を紹介するのはまたの機会とします。「本」って、ほんとうに面白い。

本との出会い 私の読んだ本

千秋&死&成長

湯本香樹実 著『ポプラの秋』
(9/Y 文庫コーナー)

安藤ちはる　中学校2年Ａ組

私は今までに数多くの本を読んできました。それらの本はどれも違ったジャンルのもので、パッと目についた本を読んでいたと思います。「ポプラの秋」もまた、偶然かつ奇跡的に読んだ本の中の一つでした。

この本の主人公は千秋という少女。そして、この物語は千秋の父が交通事故により亡くなったことから始まります。わずか小学一年生で父を亡くしたことをこの少女はどう思っていたのでしょう？　私は中学二年生で父は普通に生きています。もし、父が死んでしまったら……と考えても今の私にはその時の気持ちははっきりとは分かりません。ただ「悲しい」という言葉だけが胸の中でさまよい続けると思います。小学一年生の千秋もきっとそうだったのではないでしょうか。そしてこの経験こそが、今後の千秋がかかわる出来事につながったと思います。

さて、この物語には千秋が住むことになるアパートの大家のおばあさんが登場します。千秋が経験した「父の死」と「おばあさんとの出会い」こそが少女の死に対する思いをきっと変えたのです。そのおばあさんには、「あの世の郵便屋」という使命がありました。なんだ？と思った人が多いと思いますが、「あの世の郵便屋」とは、ただ単にあの世に手紙を届けるものだとおばあさんは言っています。このことが、本当かどうか分からないけれど、できることなら本当であってほしいと思います。もう亡くなってしまった人に、手紙が届くのならば、ぜひ書かせてほしいと私は思います。千秋もそうだったのでしょう。死んだ父への手紙を、一人で書いたのです。このことから、千秋は普通の同い年の子よりも成長していたことは間違いないはずです。そしてその少女はそれを知らなかったことも間違いないでしょう。

千秋はおばあさんと過ごす中で、何回か「死」と直面することがあることに気付きました。そしてそのたびに成長していくこともよく分かりました。

この本を読んでから、「死と対面することは人間の心を成長させるのだろう。」と思うようになりました。そう、きっと、楽しいことと悲しいことが存在する中で人間は生きてるのだな、と思いました。

砂の女

安部公房 著『砂の女』
(9/A 文庫コーナー)

森田麻友　高等学校１年９組

一言で言うと、「とても難しい小説だった」というのが、第一に思ったことです。

「罰がなければ、逃げるたのしみもない」

物語を読み始める時、ページをめくると一番始めに書かれていました。この言葉の意味が分からず、その意味を求めるために、そして男がどうなっていくのかを、場面を想像しながら読み始めました。

物語は、ある「男」が昆虫採集に出かけ、そこである部落の人に「泊まるところはあるでしょう」などの話をし、部落の人に案内されて砂の穴の底にある一軒の家へつれていかれたという場面から始まっています。

文体はとても難しく感じました。けれども、内容はとても面白かったです。

男が何回か脱出を試みる場面があり、そのどの試みも、読んでいて結果が気になるような、スリル溢れるものでした。

砂の中は、現実的ではありえないような暗く閉ざされた世界で、そんな中で暮らしていくなんてありえないと思いました。

けれども、段々とその世界に慣れていく様子がところどころに描かれていて、こういうのを「住めば都」というのだろうかと思いながら、それでも自分が同じ立場だったら慣れたくはないと思いました。

「罰がなければ、逃げるたのしみもない」

この言葉の意味は、読み終えた後、分かりそうで分からず、解説を読んでも難しい問題でした。

最後、男が脱出したのかどうか、そして「罰がなければ、逃げるたのしみもない」というこの言葉の意味は、あえてここでは言わないことにします。

推理小説ではないけれど、スリルや謎など、同じくらいの面白さはあると思います。読んで損はない、オススメの一冊です。

生きるヒント

五木寛之 著『生きるヒント』
(9/I/1～5 文庫コーナー)

長谷川智子　高等学校2年６組

この本は私が苦手とする要素を多く含んだものでした。いつものように図書館で本を眺めていた時でした。中奥の本棚の上にこの「生きるヒント」を見つけました。私の苦手なエッセイでしたが、推薦本なのできっと面白い本なのだろうと思いました。五木寛之という知らない作者でしたし、五巻もあるシリーズものでしたが、つまらなければすぐ返せばいいや、と軽い気持ちで借りました。

「生きるヒント」は五木寛之のベストセラーエッセイです。シリーズもので自分の人生を愛するための12章、今の自分を信じるための12章、傷ついた心を癒すための12章、本当の自分を探すための12章、新しい自分を創るための12章と、1～５巻まであります。

この本を読むことで東西南北の文化、宗教、また十種類の職業別平均寿命の統計などの知識を得て、驚きました。生の温かい言葉で文章が綴られており、とても読みやすいです。

「生きるヒント3」のなかに「幸せ」というテーマのエッセイがあります。「人生ってのは、本当にひどいもんだ。でも、だからといって自分でそれを投げすてるほどひどくない」と作家ゴーリキイが言っています。作者はこの言葉を「人生は絵に描いたように美しくハッピーなもんじゃない。なんとも言えず無惨でひどいところもある。だがしかし、そうだからといって悪いことばかりでもないんだよ。自分で死を選んだりするほどひどいもんじゃない。まあ、捨てたものでもないさ。とりあえず生きたほうがいいんじゃないのかね。その感じの言葉だと受けとりました。」と語っています。これに私はとても深く共感しました。また一般的に欠点と言われている暗いこと、臆病、忘れること、ルーズ、根気がないことが作者にかかるとそれもいんじゃないか、自分の最良の部分ではないかとなるのです。今までお腹のあたりに入っていた重りがスーと軽くなっていく感じがしました。気持ちがとても楽になりました。シリーズものを最初から最後まで読んだためしがない私でも短時間で全部読むことができました。なんだか、人生楽しくなりました。

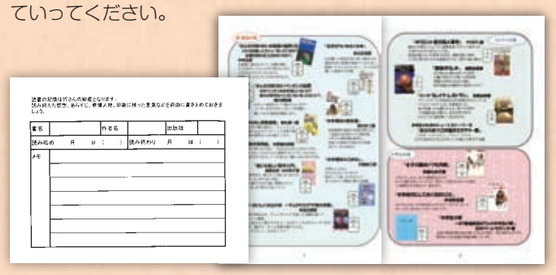
私は本を選ぶ時は今まででもなんとなく聞き覚えのない作者、題名でも手に取るようにしてきました。軽い気持ちで読んでみると面白い本に出会うこともありました。これは本が選ぶのか、それとも私が呼ばれているのかわかりませんが、常に本とはその時々の出会いがあるようです。

読書ノートが出来ました！

みなさんの学習・読書を手助けするための『読書ノート』が完成しました。先生からの各教科の推薦図書のほか、図書館からのおすすめの本も紹介されています。朝読書の図書選びなどに参考にしてください。

ノートには読んだ本の感想を書きとめておくページもあります。学生時代の読書はみなさんのこれからの人生の宝物となるものです。

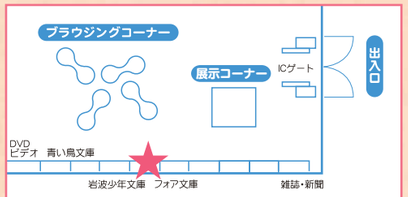
ノートを大いに活用して自分だけの読書記録をどんどん書きためていってください。



朝読コーナーOPENしました

「名女の素100のレシピ」のコーナーが出来ました。高校生、中学生、教科別推薦図書コーナーと分けて展示してます。そのどれも、図書館員や先生方のお墨付き「読んで納得、感動、ひらめき」を与えるものばかり!!!

「なんか読むものないかなぁ～」と思ったらまず、ココの本を読んではいかがでしょう。



朝読コーナーは、入り口を入って、左にあります。
シリーズものは一部、一般開架にもあります。

実りの秋

ほんの木の収穫

今年の夏、長期貸出では約900冊の本が借りられました。
そこで、たくさん読んでくれた本の紹介をしてほしくて、みなさんのコメントを「りんご」にしてみました。
りんごが、たわわに実り収穫のときをここぞと待っていますので、みなさんも面白かった本や感動した本を「りんご」に書いて紹介してみてはいかがでしょうか。
また、これまで、ほんの木に寄せてくれたたくさんのコメントの葉っぱや桜の花びらをアルバムにしました。
この中から、読みたい本を探すもよし、読み返して再度、ほんの木のコメントを書くもよし。
常時展示してありますので、秋の夜長の1冊を見つけてみてくださいね。

お知らせ

図書館通信

ができました！

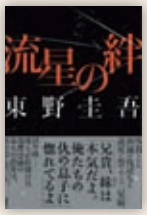
みなさんにお知らせしたいことや新着図書の案内を作りました。
面白い本の特集などみなさんと本との出会いを応援していきますので、ぜひ読んでみてください！

編集後記

名古屋女子大学中学校高等学校の新しい図書館ができて今年で3年目になります。年を追うごとに利用も増え学校の身近な存在として活用されています。今年はこれに加えて学校をあげて皆さんの読書応援が始まっています。高校での朝読書の実施とともに読書の記録として読書ノートが配られました。読書の秋、本に親しむきっかけづくりに図書館を大いに活用してください。

4月から8月の間の5ヶ月間に約3300冊の本が貸出されました。
その中から、もっとも読まれたベスト5を紹介します。

1 流星の絆
東野 圭吾 著



ドラマを観たヒトも多いハズ。
しかし、いつもの東野圭吾の人間模様の絡み具合が12話完結のドラマでは尺が短すぎて表現しきれない。
これは、「本」しかないでしょう。
視覚ばかりで一方通行のTVではなく、読んで触れて、東野圭吾 world に入ってみよう。「あれっ？」本のほうがオモシロイってなります♪（＾＾）♪

2 カラフル
森 絵都 著

映画化され、一躍、貸出ランキングの上位に立ちましたが、これは、1998年の作品です。さまよう魂の「ぼく」が自殺を図った少年·真の体を借りて、人生をやり直すチャンスを天使から与えられるというストーリー。あるがまま、こころのおもうままをさらけ出すことの大切さや周りに居る人々のちいさな思いやりをどれだけ汲み取れるでしょうか？「人生一度きり」だからこそ、大事にしてほしいことが強烈に描かれた作品です。

3 犬と私の10の約束
川口 晴 著

犬を飼ったことのあるヒトはもちろん、家族としてかけがえのない存在を実感した経験はあるはず。どうしたって、ペットの方が先に逝ってしまうのに。何度、悲しい思いをしても、ついまた、犬を家族として迎えてしまうのは、悲しい以上に「楽しいこと」「愛しむこと」があるからでは？「命」と向き合い、「生きる」を感じる一冊です。犬嫌いのヒトも、涙なくしては読めません。

4 新参者
東野 圭吾 著

こんなにも「いぃ」殺人、ほんわかミステリーがあるだろうか?! どのヒトもほんの少しの「嘘」や隠し事がある。けれども、それは「やさしさ」が生み出したものだったり……。
気持ちの良いすっきりした「ミステリー」「刑事モノ」です。一見の価値あり、ならぬ「一読の価値あり」の本です !!

5 憲法はむずかしくない
池上 彰 著

意外と読んでる「新書」、みんなも読んでる「新書」です。ランキング5位に堂々、入りました。堅いイメージを打破してくれるおすすめ本です。
時のヒト「池上 彰」が中·高生にも憲法を解りやすく解説してくれます。
導入の部分で、イラク情勢など世界の事例を掲げ、ちょっととっつきにくい「憲法」のコト、その概論と形成、条文の読み方までカンタンに紐解く＝読めば納得 !! 「池上流憲法術」です。